

顕彰状

篠田正浩氏は1949年、早稲田大学第一文学部の文学科に入学、芸術学、なかでも演劇学を専攻し、日本近世演劇に強い関心を寄せ、1953年に卒業した。学生時代における日本古典芸能への関心は、のちの映画作品に大きく花開くことになる。

卒業後は松竹大船撮影所に入社、第一作『恋の片道切符』で監督としてデビューした。安保闘争で騒然とした当時、松竹ニューヴェルヴァーグの一人として脚光を浴びたのは、第二作、1960年の『乾いた湖』によってである。1964年の『乾いた花』では、一匹狼とも言えるヤクザのニヒリズムを巧みな表現と独自の美意識の中で描き、続く同年の『暗殺』では、幕末の激動期を背景に、鋭い映像感覚によって歴史上の浪士を描写、監督としての評価を高めた。

1967年、松竹を退社し「表現社」を設立、1969年には日本的様式美と前衛的実験とを結びつけた『心中天網島』により、毎日新聞の映画コンクール大賞ならびにキネマ旬報ベストテンの第一位を獲得、若き日の代表作となった。これは近松門左衛門の原作を、モノクロ撮影と前衛的な様式美の中に大胆に描いた野心作である。1971年の『沈黙』では芸術選奨文部大臣賞を受賞し、以後、歴史や過去に題材を取ることも増えていく。たとえば江戸文化への関心は、河竹黙阿弥に基づく『無頼漢』(1970年)、近松に基づく『鍵の権三』(1986年)、写楽の役者絵と芝居小屋群像を描く『写楽』(1995年)などに現れ、自己の少年期と重なる戦中戦後の時代は『瀬戸内少年野球団』(1984年)、『少年時代』(1990年)、『瀬戸内ムーンライト・セレナーデ』(1997年)などに描かれている。なお、『鍵の権三』はベルリン国際映画祭で銀熊賞を受賞しており、この時期の作品には海外における受賞も数多い。また、学生時代に箱根駅伝のランナーであったというスポーツ体験は、1972年の記録映画『札幌オリンピック』の監督へ繋がった。

篠田氏は近年、先端的なデジタル技術を映画に応用しており、先駆けは1989年の『舞姫』であったが、『写楽』や1999年の『梟の城』を経て、その成果が2003年の大作『スパイ・ゾルゲ』に結実した。これまでの作品の特質は、清明さと耽美性、叙情性と虚無感、その狭間で緊張をはらむ作品が多く、構図や画面の美しさに美的特質を見せている。

篠田氏は長年におよぶ優れた創作活動のみならず、著作、テレビ、ラジオ、講演活動をとおして、その話題は映画から、芸術、音楽、言語、歴史、文化など多彩であり、氏の博識と話術はこれまで多くの人々を魅了してきた。早稲田大学はこれらの功績を称え、氏を芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2004年4月1日

早稲田大学